

---

## 巻 頭 言

---

### 学術活動の強化に向けて

院長 平岡 眞寛

日赤和歌山医学雑誌は、1982年に創刊された。雑誌の編集委員には、渡部良次第一内科部長（委員長）、長嶺慎一第一外科部長、榎本雅夫耳鼻咽喉科部長、静木厚三検査部長と私も聞き覚えのある蒼々たるメンバーが並んでいた。1982年2月号のわかやま日赤時報には、その当時の内藤行雄院長が、「和歌山赤十字病院医学雑誌は年1回刊行されるものであるが、その内容はすべてオリジナルのものばかりで、それを国内外に配布して真価を問うものである」と書いている。また、「学会活動や執筆活動が一般病院としては活発である。特に外国医学雑誌にその業績の発表を見ることは水準の高さを誇る資料である」と述べられている。許可病床数が664床であり、また放射線治療機器が整備されていないなど設備も不十分な時期ではあったが、学術活動の高さとその活動への誇りは、現在に決して負けていない。医学雑誌表紙の右肩にあるISSN1341-9927と言う表示を見れば、国際的にも誇れる医学雑誌との強い思いを込めて創刊されたということが容易に推論できる。ISSNとは、International Standard Serial Number：国際標準逐次刊行物番号と呼ばれるもので、国際的に刊行物を識別するために申請附与されるものである。そのため、各論文には英語抄録や英語目次が併記されている。これは、現在まで継続されている国際的な医療救援活動にも通じるものである。また、国内最大級の医学文献情報データベースである医学中央雑誌に収録されている6,706の定期刊行物のうち、赤十字の医療施設で登録されているのは30誌であり、「和歌山赤十字病院医学雑誌」と病院名変更に伴い継承した「日本赤十字社和歌山医療センター医学雑誌」のいずれも登録されているのは評価に値する。

昨年4月の院長就任以来、中期の大目標に病院の存在感（病院力）を高めることを掲げている。学術研究活動は、即効性は高いとは言えないが、時と共に着実に病院力を大きく向上させる。同じく目標としているチーム医療を質量ともに強化させる力もある。当センターには、医学雑誌創刊時から学術活動の基盤とそれを大切にしようとの文化が存在していた。ならば、学術活動の強化は当センターの文化を守り、病院力を強化する一石二鳥の方策であり、強力に推進したいのが院長の強い思いである。

学会参加は研修会を含めて活発に行われており、知識、技術の取得に熱心であることは誇るべきことである。その一方で、自ら得た知見を学会などに発表することは、当センターの実力に比して不十分と言わざるを得ない。臨床業務の多忙さは年々増大していることは承知しているが、それを言い訳にして良い理由がないことは明白だ。

病院職員の学術活動強化に向けて病院が支援できることは無いか、35年間の大学勤務経験も踏まえて取り組んでいる。学術活動の基盤となるのが図書館である。西館4階にある医療者向けの図書室は、広くはないが中味は充実している。購読している医学雑誌は国内外の臨床系著名雑誌をほぼ網羅し、書籍あるいはUp To Dateなど診療決定に欠かせない二次情報誌も整備されている。これらの費用は大きな額となっているが堅持したいと思っており、今まで以上の活用を願っている。

以下に検討中のものを紹介する。第一は、学術研究活動行うための研究費の獲得である。文科省

の科学研究費（科研費）に申請できる機関に当センターを加えてもらうべく活動している。この申請可能な機関は大学が圧倒的に有利である。来年度に開設される東京医療保健大学の和歌山看護学部（仮称）の教育に深く関与する当センター職員には、申請資格が付与される可能性は高いが、当センター自身が科研費申請機関として承認されることが絶対的に望ましい。文科省の科研費は、競争的研究資金として最も大きなものであり、また、多様な研究活動を支援してくれるものである。公的病院には、国立病院機構、日赤病院、済生会病院などがあるが、そのうち国立病院機構傘下の病院は基本的に科研費に申請できる資格を有している。規模、医療レベルにおいて国立病院機構に決して劣っていない日赤病院だが、科研費については遅れており、申請できる病院は未だ存在していない。日赤病院の中で当センターが最初の病院になるべく、管理局・総務課が対応している。

臨床研究の基盤強化には、臨床治験の強化が一つの有力な方策である。治験費用をもっと使いやすくして、臨床治験への関心を高めることが有用と考え検討中である。また、電子カルテ情報を活用した臨床研究の展開を模索中です。京都大学大学院医学研究科の社会医学専攻にて大学病院、地域の中核病院を巨大ネットワークで繋ぎ、医療情報をビッグデータとして解析するプロジェクトが進行中である。当センターの病院データを現在ネットワークに接続する作業を行っているが、その先には、当センターの診療データを利用した臨床研究への展開が可能となるものと期待している。更に、京都大学の社会医学専攻においては、臨床研究を推進できる研究者養成プログラム（Master Program for Clinical Research：MCR）が稼働しており、そこに当センターの医師等を参画できないか検討中である。

日本赤十字社和歌山医療センター医学雑誌第34巻を皆様の元に届けます。創刊から33年間、毎年本雑誌が刊行されたことは称賛に値する。第34巻は、総説、原著、症例報告、日常的な活動報告と当センターにおける多様な学術活動を紹介する内容となっている。第34巻刊行を可能とした投稿者並びに学術委員会の皆様に感謝申し上げます。

今後、学術活動を一層強化する中で、日本赤十字社和歌山医療センター医学雑誌が質量共に更に充実することを願ってやまない。